

こまきこども未来館講座運営評価シート

あそび	利用対象児童(0歳～18歳)が日常的に気軽に利用できる環境づくり	自己評価点	A	講座運営会議評価	A
	【評価のポイント】 ・児童館は0歳～18歳までのすべての児童が自らの意思でひとりでも利用することができる環境づくりが大切。 ・すべての児童が気兼ねなく、いつでも、何度でも気軽に利用できる環境となっているか。 ・すべての年齢層が十分に利用できているか。	【コメント】平日午前を中心とした乳幼児親子利用に対応して、誰でも簡単に楽しめる遊具や工作の充実を図った。リピーターも多いため、訪れる毎にワクワク感を感じることができるよう、展示物や遊具の更新に努めた。日常的に来館する小学生に対しては、職員(以下コミュニケーターと表記)が積極的に関わりを持ち、個々の児童のニーズに応じた遊びや制作活動などを提案した。課題となっている中高生に関しては、新たに「アートプレイス」(音楽・演劇・美術など芸術分野の活動ができる拠点づくり)を立ち上げて利用促進をめざしたが、中高生のニーズに応じきれっていない面もあって十分な成果にはつながっていない。今後の課題として検討を続けたい。 【エピソード】アイコン的な展示物であった「大きい車」が老朽化したため新造を行った。作業中から期待の声が聞かれるとともに前車の解体を惜しむ声も多く、急遽、短時間で製作可能な車を増車した。幼児から大人まで幅広い層に人気で、親子のフォトスポットにもなっている。		【評価に対するコメント】 何度来てもワクワク感を感じられるよう、展示物等の更新に努めている。中でも、「大きい車」が新造されたことは、未就学児から大人まですべての年齢層が関心を持って楽しんでいる様子が見られる。また、中高生利用に関しては、「アートプレイス」等、これまでの体験ひろばに限らず、交流ひろばでも講座を開催するなど、館内全体を会場とした積極的な利用促進のために企画されていることは評価できる。今後実績として利用が増加する改善を期待する。	
	活動を通じた発達の増進	自己評価点	A	講座運営会議評価	A
	【評価のポイント】 ・児童館は、児童と長期的・継続的に関わり、遊びや創作活動などを通じて、児童の発達の増進を図ることが大切。 ・児童の発達を理解し、発育段階に応じた知識や技術の習得に向けた身体活動や創作活動ができているか。	【コメント】コミュニケーターが造形物や遊具・玩具の製作を積極的に行っている。幼児はそれを見て楽しみ、遊び道具にしているうちに「作りたい」と願うようになる。コミュニケーターはそれに応じながら発達段階や個々の成長に合わせて遊びや工作に導いている。折り紙やハサミなど基礎的な用具の扱いから、カッター・コギリ・スチロールカッター・インパクトドライバー・電動糸のこ盤・ジグソーなど、コミュニケーターが補助や見守りを行う中で難易度が高いものにも挑戦できるような環境を整えた。 【エピソード】コミュニケーターが発泡スチロールで魚を作って釣り遊びの玩具を製作すると、幼児から高学年までが幅広く遊ぶ中で「自分も魚を作りたい」と声を上げ始めた。年齢や技能、保護者の付き添い状況などに応じて、折り紙やダンボールなどでの工作に導き、最終的には多くの児童が実際に発泡スチロールカッターを使った本格的製作を体験するに至った。		【評価に対するコメント】 平日の午前にも未就学児親子が楽しそうに工作をしている様子が見られ、幼児に対しても発達の段階に合わせた積極的な関わりができている。開館3周年を迎え、継続的に来館する児童も増加している中で、個々の経験に合わせた柔軟な対応、環境の整備が図られている。危険を伴う工具の使用など、大人の補助が必要なものについて、サポーター等の協力も得ながら「いつ来ても体験・挑戦できる」環境の整備を期待する。	
まなび	児童が主体的かつ創造的に活動できる環境づくり	自己評価点	A	講座運営会議評価	A
	【評価のポイント】 ・児童館は決まった遊びを児童に与えるだけでなく、主体的かつ創造的に活動できることが大切。 ・児童が、自由な発想で工夫して創造できる環境となっているか。 ・児童の自主性や主体性を育む企画となっているか。	【コメント】こども参画イベントとして夏と秋の2回、「こまき冒険スライム村」を開催した。実行委員を公募し、児童自らプロジェクトマネジメントの概念や手法を学びながら企画から準備・運営に至るまで自分たちの力でこなして多くの気づきや学びを得ることができた。他にも「未来館放送局」「デジタル隊」を継続開催する中で子どもたちが独自に発想を広げたり、自由に創造したりする場が継続している。また、そうした環境の中で、初の試みとなる「こども講師」という取り組みを実現することができた。小学校6年生2名が自らワークショップを企画して講師を務めた。 【エピソード】「こども講師」では体験ひろばでの工作を継続するなかで体得したダンボール製のブルバックカーを製作するワークショップと、ゲームプログラミングを学ぶワークショップの2講座が開催され2名のこども講師が誕生した。参加者からは「大人講師のワークショップよりもっと楽しい」といった感想や、「次は自分も講師をやってみたい」という前向きな声も聞かれるなど、今後に向けての萌芽となる活動となった。		【評価に対するコメント】 こまき冒険スライム村の他、こどもの持つ知識やスキル、好きなことへの情熱を他のこども達に届ける「こども講師」や未来の社会に対して、こどもが自分たちの意見をのべる社会参画の場として「未来の〇〇サミット」など、積極的に新たな取り組みを実施し、こども達の主体的な活動の場づくりを行っていることは評価できる。 今後も、企業や団体等と協力しながら、こどもの自主性や主体性を育む企画の充実が図られることを期待する。	
	学びを振り返り成長を実感できる環境づくり	自己評価点	B	講座運営会議評価	A
	【評価のポイント】 ・主体的に活動を進めるには、これまでの学びを振り返り、自分を客観視し、次の学びへ繋げる連続性が大切。 ・目的や方法を自ら考えることができる力を育てる環境となっているか。また、働きかけができているか。 ・これまでの自分の活動を振り返ることができる仕組みや環境を設けているか。	【コメント】工作「今日はなににつくる？」で生まれた作品は、本人が希望すれば1か月間作品コーナーに展示され、ふり返りや次の制作への動機付けなどに役立てている。各体験講座では講座終了後にアンケートを実施し、ふり返りを行う取り組みを継続している。また、こども参画の「こまき冒険スライム村」は間を空けることなく2回目を開催したことにより、前回のふり返りを生かす場としての機能を持たせることができた。自らの反省や他から得たフィードバックなどを反映して次の活動に取り組むことが可能となり、学びの連続性を生み出すことにつながった。一方で来館者全員が個人で学びを振り返る機会というのはまだつくれていないことが課題となっている。 【エピソード】イベント企画は単発的になりがちな面があるが、人的にも企画の面でも継続的な活動が可能となったため、個々の参加者にも失敗や挫折を乗り越えようとする姿勢が生まれ、それを確認する貴重な機会となった。		【評価に対するコメント】 学びを振り返り自分を客観視して次の学びに繋げる連続性を大切にしていることは間違いない。とりわけ、夏と秋に開催した、「こまき冒険スライム村」では、開催中に毎日、閉館後にこども達が集まり、その日の取組について、良かったこと、悪かったことを共有し、次への改善につなげており、こども達の成長が実感できる取り組みとなっていた。 引き続き、こども達自らが振り返りの大切さを実感できる環境の整備を期待する。	
交流	利用者同士の関係を豊かにする交流環境づくり	自己評価点	A	講座運営会議評価	A
	【評価のポイント】 ・児童館は幅広い年齢の児童が出会い、交流できる場であることが大切。 ・講座や活動において、異年齢児童と一緒に交流しあって取り組める工夫がされているか。	【コメント】各種講座やイベントにおいて、できるだけ幅広い年齢層のこどもが参加できるよう配慮し、活動の中で異年齢交流が生まれるように促した。また、日頃の活動の中でも、困っているこどもに対してコミュニケーターが助言や手助けを行うばかりではなく、他のこどもにつなぐことで解決を図る体験に導き、一緒に遊んだり助け合ったりできる集団づくりを行ってきた。 【エピソード】プログラミング講座を開いたこどもから常設的に活動が続けられる「マイクラ部」設立の提案があり、入部希望者を募って現在も活動を継続している。メンバー間のトラブルや飛び入り参加者への対応など難しい問題に直面しながらも、解決に向けて自分たちで話し合いを進めるなど貴重な交流の場となっている。		【評価に対するコメント】 各種講座やこども参画の実行委員などにおいて幅広い年齢層が参加し、一緒に遊んだり助け合ったりできる集団づくりに努められていた。 引き続き、こども達との関わりの中で意見を聞きながら異年齢交流の環境づくりに努めていただきたい。	
	障がいの有無や国籍の違いを越えて児童がお互いの理解を深める取り組み	自己評価点	B	講座運営会議評価	B
	【評価のポイント】 ・すべての児童を対象とする活動を行う児童館では、様々な児童がお互いに理解を深められる工夫が大切。 ・障害の有無や、国籍の違いを越えて思いやりを育み、学びあいができる働きかけや工夫ができているか。	【コメント】未来館サポーターの外国人による多文化交流をテーマにした「交流・体験CAMP」を継続的に実施した。「ハロウィンCAMP」では、多文化交流、サポーター同士の交流、多世代交流を目的に外国人にもなじみのあるハロウィンイベントを企画した。また、同じく「ハッピークリスマス」では、出身国が違う多文化サポーターたちがダンスやクリスマスソングを通して参加者と交流した。障がい者の視線入力を体験する「交流・体験CAMP」も実施したものの、多文化交流に比べると回数が少ないことが課題。 【エピソード】外国人サポーターによるCAMPやイベントはしっかりと定着しており、工作や交流を楽しみにしている児童や保護者も増えている。ダンスイベントは地域の外国人児童の参加もあり、来館者とともに踊ったり、コミュニケーターも演奏に加わったりするなど交流が深まった。		【評価に対するコメント】 ダンスイベントにおいて、国籍の違うサポーター同士の交流の他、地域の外国人児童が楽しく参加している姿も見られた。今後も、継続的な取り組みを通じて、障がいを持った児童が参加しやすいCAMPや国籍の違いを越えた学びあいの場など、企業や団体等のサポーターの協力を得ながら、児童がお互いの理解を深める取り組みを促進していただきたい。	

保護者にとっても楽しく過ごしやすい環境づくり	自己評価点	A	講座運営会議評価	A
【評価のポイント】 ・保護者同伴で来館する幼児親子などにとっては、一緒に体験する保護者も過ごしやすいことが大切。 ・児童だけでなく、保護者も一緒に楽しむ工夫や、くつろげるよう取り組みがされているか。	【コメント】コミュニケーターは、こどもと保護者が一緒に工作を楽しんでいる様子を時に見守り、時に声をかけて保護者とこどもの成長の喜びを共有している。また、クリスマス企画として「親子でマルシェCAMP」を開催し、親子で楽しめるクラフトを7つの団体が出展・提供した。 【エピソード】父親はスマホからほとんど目を離さず時折こどもを叱りつけるだけという来館者。コミュニケーター間で情報を共有し、父子が交流できるよう促す方法を模索した。あえて厚い段ボールやグルーガンを使う工作を提案するなどし、父親の介入を促していった。まだ壁はあるものの、母親の誕生日ケーキの模型を力を合わせて作るなど、ほほえましい場面を見ることもできている。		【評価に対するコメント】 保護者やこどもと一緒に楽しめるきっかけづくりにより、体験ひろばでは、親子が自由工作などを楽しむ光景が多く見られるようになった。今後も、親子で一緒に体験し、楽しめる取り組みを継続して実施していただきたい。	
保護者同士の交流環境づくり	自己評価点	B	講座運営会議評価	B
【評価のポイント】 ・児童館における保護者同士の交流は、子育ての悩みや喜びを分かち合う大切な機会である。 ・活動への参加だけでなく、保護者同士が交流する機会となるよう意識した運営となっているか。	【コメント】乳幼児向けの講座に力を入れ、継続的に開催することでリピーターが増えてきた。参加者同士が顔なじみになっていくため、同じような年齢の子を持つ親同士、自然に会話を交わす場面も見られるようになってきた。まだその多くが職員を介しての交流となっているため、今後もコミュニケーターが働きかけることで、参加者同士の関わりを促していきたい。 【エピソード】大人Makersでも保護者同士の交流が継続している。子育て中でのコミュニケーターや一般来館者も加わりながら保護者としての悩みを相談する場面も見られた。		【評価に対するコメント】 保護者同士が協力し合って作業を行う、大人Makersでは、交流が深まってきている。乳幼児向けの講座について、引き続き、継続的に開催し、コミュニケーターを通じた交流のきっかけづくりに努めていただきたい。	
地域との積極的な連携および地域住民が関わりやすい環境づくり	自己評価点	A	講座運営会議評価	A
【評価のポイント】 ・地域ぐるみで一緒により良い児童館を創り上げていくために、地域の団体や企業、住民との良好な連携が大切。 ・地域の団体や企業、住民に積極的に協力や連携を働きかけているか。また、様々な形で連携を行っているか。 ・団体、企業などのグループだけでなく、地域住民や保護者などが個人でも関わりやすい環境となっているか。	【コメント】様々な機会を活用して地域の企業や来館者などにも働きかけを行ってきた結果、「未来館サポーター」の登録者数は2024年3月現在で177人・107団体で、前年度に比べて25人・25団体のプラスとなった。また、交流体験CAMPは開催数こそ年間272回とほぼ前年度並みながら、26組の新規出展者を開拓することができた。 【エピソード】サポーターの声を直接聞き交流を図る「みんなで育てよう！こまきこども未来館ワークショップ」では、サポーター、こども、保護者、地域の教員、未来館ワークショップの講師など、未来館に関わる多様な人々の参加を得て、未来館への理解を更に深めるために自らデジタルコンテンツを体験したり、互いの考えを聴き合ったりなど交流を深めることができた。		【評価に対するコメント】 積極的に企業・団体の訪問などを行い、新たなサポーター確保に努められ、協力を得られていることにより、こども達が楽しく多様な価値観に触れる機会の創出につながっている。 また、「みんなで育てよう！こまきこども未来館ワークショップ」では、積極的に発言できる環境が整えられており、また、サポーター同士の意見交換などにより、交流が深められている。	
利用促進につながる効果的な広報活動	自己評価点	B	講座運営会議評価	A
【評価のポイント】 ・運営への理解を広め、ここでしかできない活動の魅力の周知は、活動への参加を促すために大切な活動である。 ・効果的な広報活動ができているか。施設周辺地域だけでなく、市域全域（及び市外）に広く広報できているか。	【コメント】SNSやホームページだけでなく、小牧市内の小中学校に協力いただき、全校生徒にチラシを配布。保護者や児童にも未来館の講座やワークショップ、イベントを周知しました。近隣の高校へも協力を依頼し、高校生向けのイベントの宣伝を行う。イベントの際にはプレスリリースを行い、マスメディアからの取材を受け、広報や認知向上を図った。一方で近隣高校への依頼のみとなっていたことが来年度への課題。 【エピソード】こども参画（こまき冒険スライム村）の実行委員募集では、小中学校へのチラシ配布により約60名の応募があった。「チラシ見たよー」とこどもたちが未来館に来てくれるだけでなく、こどもたちが取材された新聞記事の切り抜きを額装して届けてくれる大人のサポーターも。その新聞記事を見て誇らしげなこどもの姿が印象的。		【評価に対するコメント】 これまでの学校へのチラシ配布に加え、小牧市の公式ラインなどのSNSも積極的に活用していた。こども達への周知は、学校を通じた周知が効果的であるため、今後も各学校に協力いただける関係づくりに努めるとともに、マスメディアにも積極的に働きかけていただきたい。	
児童へのかかわり	自己評価点	A	講座運営会議評価	A
【評価のポイント】 ・児童館の職員は、活動の援助・指導と共に、個々の児童に対して体調や心理状態に応じた適切な対応が必要。 ・失敗やトラブルに対し、自己肯定感を育み、より良い方向へ成長していけるよう適切な関わりができているか。 ・一人で来館したり、悩みや不安を抱える児童へ適切な関わりができているか。	【コメント】児童厚生員研修への参加を積極的に行うことで、児童への対応についての基礎的な学びを得ている。また、日々の児童対応の中で気になった点や、児童同士のトラブル、支援を要するこどもへの関わり方などについては市の児童厚生員とも連絡を密にし、情報を共有してより適切な対応ができるよう心がけている。 【エピソード】頻繁に利用する女子児童が、コミュニケーターに対して暴言や叩くといった行為を繰り返すことがあった。そうした行動に走ってしまう理由や背景、改善に向けての対処法などを関係職員で話し合うなかで、「こちらから率先して声をかけること」「児童の声にしっかりと耳を傾けること」などを確認し対応に当たった。当該児童は徐々に落ち着き、職員に笑顔で接することが増えると同時に、友だちとのトラブルも減少した。		【評価に対するコメント】 児童厚生員研修への極的な参加や市の児童厚生員との連携などにより、適切な対応に向けた情報共有を図られている。今後も、市の児童厚生員と連携を図りながら、こども達との適切な関わりに努めていただきたい。	

【評価点について】

S	大変よくできた
A	よくできた
B	できた
C	あまりできなかった
D	ほとんどできなかった

【エピソードについて】

各評価項目について、講座等の活動を行う中で、実際に見られた児童の様子などのエピソードを、できるだけ具体的にわかりやすく記入してください。